

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
2012 年度 JASSO ショートビジット派遣報告書

報告者氏名 渡部 智之

2012 年度 (入学)

1. 研究課題:

デリーの児童開発スキームにおける分権化と NGO による参加型開発
—多様な組織の役割の変化に着目して—

2. 渡航先:

現地滞在期間: 平成 25 年 1 月 10 日 ~ 25 年 3 月 15 日 (65 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

調査地での本研究の目的は、デリーの総合的児童開発サービススキーム(以下 ICDS)において、施策改定又は実施面での多様な組織が果たす各々の役割を詳細に明らかにすることであった。今回グローバル企業から資金提供を受けながら、ICDS の実施に関与する 2 つの異なる NGO が活動するスラムを調査地とした。特に女性住民組織の構成員の「参加」に着目するとともに、施策改定又は実施面で住民参加がどのような影響を及ぼしているのかについて、住民と接する NGO 職員、幹部職員、役人、サービス提供者等に聞き取り調査を行った。

施策実施面では、女性住民組織の構成員に NGO が期待する参加目的、ICDS のケアワーカーと構成員の関係性など、様々な場面で NGO の理念やプロジェクト目的が影響を与え、女性住民組織が果たす役割に違いを生じさせていることを知ることができた。

また施策改定面では、行政官や ICDS に関与する NGO によって作成される報告書に着目することでスラム住民から得た情報、意見が施策改定に反映される可能性を知ることができた。

以上のように今回の調査では、フィールドワークから施策実施面及び改定面での知見を得ることができた点はもちろん、研究に協力してもらえよう人間関係をスラム住民と築くことができた点で有益な渡航となった。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や長期的な展望について述べてください

調査地では、住民と行政官の情報のやり取りや住民と NGO 職員との交流はヒンディー語が使用されており、住民参加の詳細な調査を進める上で、住民との距離をより縮めるための言語習得が課題であると実感した。そこでさらなる言語能力の向上に向けた長期的な留学も視野に入れて今後研究を進めていきたいと考えている。

5. 本プログラムに参加した感想や、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいか、希望をお聞かせください

本プログラムでは、フィールドワークを自身の研究課題に沿って柔軟に調査活動を実施できること及び受け入れ先の機関である発展社会研究所の図書館を容易に利用することができることが非常に有益であった。

*1 ページを超えないようにしてください。

* **プリントアウトして、署名を記入の上、提出してください。**

署名